

優秀賞

パン屋さん

八尾市立高美中学校 三年 加藤 萌絵

私の家のとなりにはパン屋さんがある。でも私はそのパン屋さんでパンを買ったことがない。

最近、私の家の近くに友達が引っ越してきた。その友達は学校の行き方が分からないと言うので一緒に登下校することになった。今まで一度も友達と登下校することがなかった私は嬉しかった。その途中、軽く町案内をした。近くに美味しいレストランがあること。このお店は安くてかわいい服が売っていること。そして私の家のとなりにはパン屋さんがあること。友達は「おいしそう。」と言った。その時、私は何も考えないで「でも障がい者が働いてつくってるんだよ。」と言った。友達は「そんな言い方やめなさい。」と冗談まじりに私を注意した。

学校に着いて私はどうしてあんな言い方をしたんだろうと考えた。別にパンが美味しかったら誰が働いていようと関係ないだろうと思った。私自身、学校でよく人権についての勉強をする。学校が「人権を大切に『学校』であるからだ。人種差別、国際問題、「障がい者差別」などこの三年間でたくさん学んできた。でも今私自身が差別をしていることに気がついた。パンを買わないことが悪いわけではない。パンを買わない理由がいけないのではないかと思った。その理由は「障がい者がつくっているから」だ。障がいのある人がつくっている、ただそれだけで買う気がなくなっている自分が嫌いだ。

なぜそう思いはじめたのか。それは分からない。実際に何か危害を加えられたわけでもなく、パンがまずいという話を聞いたわけでもない。

この前、社会の授業の余談でこんな話があった。「一つの町が差別されているとする。その町に何も知らない人が引っ越してきたとする。もちろんその人も差別される。そんな何も知らないまま差別されている人がだんだん増えていく。そしたらいつのまにか差別されている本当の理由が分からなくなっていく状況ができていく。」

その話を聞いたとき本当になるほどなと思った。まさに今、私はその状況にいるんだと思った。でも本当の理由なんてあるんだろうか。特に障がい者差別に本当の理由なんてあるんだろうか。私はないと思う。あるとしてもそれはただの「偏見」であったり「思い込み」だと思う。障がい者が作ったものが美味しくないという根拠なんてない。私はパン屋さんに対して「偏見の目」で見ていたのだと感じた。

学校からの帰り道でいつものパン屋さんを見てみた。そこからは丁度キッチンが見えた。一生懸命パンをこねている姿を見ていると自分が情けなく思った。右側を見ると私の好きなアップルパンが並んでいた。でも今の自分には買うことができないなと思った。そのアップルパンは見るからに美味しそうだった。

次の日の朝、いつもと同じように友達と一緒に学校へ行った。そしたら「今日はお弁当じゃないからあのパン屋で買う。」と友達が言った。そして私は初めてあのパン屋さんに入った。友達はメロンパンとアンパンを一つずつ買って一つは今、食べると言った。初めて入ったパン屋さんはとても落ちついた雰囲気だった。どのパンを見ても全部美味しそうだった。私は今までもつたいないことをしていたなと思った。近くにこんなに美味しそうなパンがあるのに買わずにいた自分に本当にあきれそうになった。

そして歩きながらパンを食べる友達を見て昨日、自分が言った言葉を思い出した。あんな言い方をしたのに何も変わらないでパンを買って食べている友達が私には少しカッコ良く見えた。自分の意見を曲げないっていうことはこういうことなんだなと思った。でも、これが当たり前なのかもしれない。こういう友達のような人が増えていくと、差別が減るのではないかと思った。美味しくみえたから買った、誰が作っても美味しいものは美味しと思えるような人が。

友達が私に「一口食べる？」と聞いてきた。その日は朝食が少なかったので一口もらった。初めてあの店のパンを食べた。今まで食べたパンの中でこんなにもいろいろのことを考えて食べたパンは初めてだった。やはり味は見た目どおりで美味しかった。そして、私は思った。「差別してもつたいたいことをしているだけで何も良いことなんか無い。気持ちが悪くなるだけなのだ」と。そこで私はもっと自分が成長したらあのアップルパンを買いに行こうと決意した。